夕刊　読売新聞　昭和50年(1975)8月2日(土)　(第三種郵便物認可)

現代に問われる柳田学

国際化への展開不可欠

日本的な固有性検討を

九段グランドパレスのシンポジウム会場

生誕百年記念セミナーから

日本民俗学の父、柳田国男の生誕百年を記念する国際セミナー（柳田国男生誕百年記念会、日本民俗学会主催）が、七月二十八日から三十日まで、東京・九段のグランドパレスで開かれた。その中心となった国際シンポジウムには海外七か国十二人、国内からは民俗学者のほか社会思想史、政治学、文化人類学、歴史学など周辺諸科学の専門家も多数参加した。これは日本民俗学会はじまって以来の画期的なことである。

近隣諸国と協力新可能性を

全体のテーマに「日本文化の普遍性と特殊性」を掲げ、「日本人の神観念」「日本の昔話」「総括と展望」の四課題について討論され、毎日の日本民俗学会記念研究発表会でも、日本民俗学が当面している課題について論じられた。

二日間の討議を通して浮かびあがったのは日本固有なものとは何か、柳田の学問と思想は、現在も有効か、といった問題で、このことをふまえてアジア近隣諸国との協力による比較民俗学への広がりを通して柳田学の新しい可能性が追求された。

シンポジウムの発言の中で現代の関心を最も的確にあらわしたのは、橋川文三氏であった。橋川氏はクネヒト氏（スイス）が日本人の固有な自然観を「内なるものへの親近感」と「外なるものへの恐れ」として提示し、自然と生活のバランスについて語ったことを受けて「柳田が日本民俗学として大成させる学問をはじめたのは、自然と生活とのバランスが崩れ、日本人が政策として作為的に生きるようになった一九〇五年、日露戦争の直前であった。マリウス・ジャンセンがいう〝明治日本から〝帝国日本〟への移行期であった」と指摘した。同様に住谷一彦氏も「柳田が農政学に取り組みはじめたのは農工商のバランスが崩れた時期と符合する」と述べた。

現代的視点を欠いた民俗学

まさに、柳田民俗学が誕生した時代は、現代の状況にきわめて類似している。橋川、住谷氏の言葉をふまえると、柳田の提示した日本的な固有性と現代性の問題がより明確になってくる。

シンポジウムを聞いて、この日本的固有性の問題で感じたことは、なお再検討が必要である、ということである。

柳田が「先祖の話」および新国学談三編を書き、日本民族・文化の中心となる固有信仰＝祖霊信仰を打ち出したのは、敗戦によって精神の荒廃した日本人に生きる力を与えるためだといわれるが、この祖霊信仰もインド・ゲルマン系民族の信仰、仏教思想との比較からこれは従来の民俗学が、農村といわゆる常民を対象に限定することによって、都市化にともなう〝流れ〟として提示し、自然と生活の比較検討が必要である」と指摘した。

一方、長く柳田学を研究しているモース氏（アメリカ）は「日本民俗学の形成過程はユニークであるが、国際的に比較すると、日本文化の個別性より普遍的なところが浮き上がってくる」と述べたことも注目される。

現在学としての柳田学も、二つの焦点となり、三つの点が注目された。

その一つは色川大吉氏が「今日の民俗学は現在の民衆固有の不安から出発すべきだ」と述べ、「具体的に森崎和江氏が「奈落の神々」で書いた筑豊炭坑の山の神をとりあげ、農村共同体から流出して、流れ工夫として定着した筑豊炭坑あたりに生活する人々が、山の神をたよりに生きている例をあげた。これは従来の民俗学が、農村といわゆる常民を対象に限定することによって、都市化にともなう〝流れ〟とか現代的視点を欠いているとの比較検討が必要である」と指摘された。

一方、長く柳田学を研究しているモース氏（アメリカ）は「日本民俗学の形成過程はユニークであるが、国際的に比較すると、日本文化の個別性より普遍的なところが浮き上がってくる」と述べたことも注目される。

現在学としての柳田学も、二つの焦点となり、三つの点が注目された。

もともと柳田は「経世済民」の学問としての現在学をたえずめざしてきたといえる。住谷一彦氏は柳田の農政学という視角から農政学探求の理由として、〝国民総体の幸福〟の達成をあげ、生産はあくまで手段であるといい、高度成長は目的でないことを先取りしていた。柳田がいう国民とは、現在、生きている人間だけでなく、将来生まれてくる国民も利害に関係するといい、生まれ死んでいった数千万同胞についても考えている。このことは戦後混迷していた日本人を救済するため、新国学の提唱に結びついたと考えられる、と説明した。

以上二つの視点をふまえて、日本民俗学の将来を考えると、民俗学の国際化と比較民俗学への展開は不可欠である。

柳田は昭和十二年、「比較民俗学」について語ったあと沈黙を守り、晩年になって今後の課題だと述べたといわれる。今日、比較民俗学を展開するためには「国際交流を深め、若い学者をどしどし外国へ出すこと」（モース氏）は前提だが、朝鮮、中国、台湾といったアジア近隣諸国との国際協力による調査を行い、「一方的に取り、利用するだけでなく、相互に利用しあう」（池田相氏）ようにして、十分な理解を深め、そして、近隣諸国との比較研究によってアジアの心を結びあってこそ、柳田が抱いた心意を理解することになるのではないか。

柳田は、〝時代の子〟といわれ、いつの時代にも事あることに役にたってきたが、その〝利用〟はいま百年記念祭の時点からふりかえると、キンタロウあめのように、ステレオ・タイプなパターンになりがちであったことを思うと、このあとに何が残るか疑問だ。もちろん現代が柳田に求めるものは多いが、必要なのは批判的継承だというのが、シンポジウムを聞きながらの印象であった。

（増永記者）